



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2503 号 2015.6.21 発行



寅さん会館 来春再開へ 読売新聞 2015年06月20日
奥のガラス戸に「休館中」の文字が貼られた会館（19日）

俳優の渥美清さんゆかりの品を展示する「渥美清 こもろ寅さん会館」（小諸市古城）が来春、再開する見通しとなった。経営難による休館から約2年。渥美さんの人柄や、映画「男はつらいよ」に魅了された人たちが、「若い世代にも楽しんでもらえる新たな寅さん会館を作りたい」と再開の準備を進めている。

会館は1995年にオープンした。市内で電気工事会社を営んでいた井出勢可さんが館長を務めた。井出さんと渥美さんは共通の知人の紹介で知り合い、交流を深めた。渥美さんは井出さんのことを「小諸のお父さん」と呼んで慕った。小諸はその後、第40作「寅次郎サラダ記念日」（1988年）のロケ地となった。

会館が収蔵・展示しているのは、渥美さんの衣装や小道具など映画でもおなじみの品。オープン前、井出さんが「お父さん、撮影所までトラックで来て」と言われて行って、渥美さんから受け取ったもので、約1700点に上る。

渥美さんは、井出さんの長男・竹弘さん（55）に脳性まひの障害があることを気にかけていた。「会館があれば、働くことができるから」と話していたという。

渥美さんはオープン翌年の96年8月に亡くなった。来館者は97年に12万人を超えたのをピークに年々減少し、2012年には約7000人に落ち込んだ。この年の10月に井出さんが亡くなり、閉館した。展示品は建物ごと市に寄贈された。

市が今年、自前で運営するのを条件に、施設を無料で貸し出す形で運営団体を募ったところ、観光人力車を引く一井正樹さん（34）が手を挙げた。

一井さんは岩手出身。長野に来て仕事で落ち込んでいたときに、たまたま見た「男はつらいよ」に魅了され、ファンになった。小諸と渥美さんとのつながりを知り「展示施設が小諸になきゃいけない」と思った。共感の輪は広がり、市内外の30人が「いつもココロに寅さんを♪」という団体に所属し、運営にかかわる。

「再開すれば最初はファンが戻るかもしれないが、ただ、ゆかりの品を展示するだけでは、いずれ経営が厳しくなる」と一井さん。展示品を絞ってテーマ性を演出したり、カフェスペースを作ったりして、「新たなファンを作り出す場所にしたい」と話す。

竹弘さんは「多くの人が訪れてくれればおやじや渥美さんも喜んでくれる」と再開を心待ちにしている。

流出の基礎年金番号、9月に変更 電話窓口の応対改善へ 朝日新聞 2015年6月19日

日本年金機構の個人情報流出問題をめぐり、安倍晋三首相は18日の衆院予算委員会の集中審議で「国民の皆様にご不安、ご迷惑をおかけしていることについて大変申し訳ない思いだ」と陳謝した。その上で「二度とこうしたことが起きないように、機構の監督指導体制

の一層の強化を図っていきたい」と述べた。また、機構は情報が流出した該当者の基礎年金番号を9月から変更すると表明した。

基礎年金番号は年金の加入記録を管理するため、原則1人につづつ割り振られている。番号は約125万件が流出し、機構は情報の悪用を防ぐため該当者全員の番号を変える方針。システムの改修が必要で、機構の水島藤一郎理事長は変更時期について「9月を予定している」と述べた。

審議では、機構の専用電話窓口などでの対応も問題視された。いまは流出が確認できた番号に該当しない人には「お客様は該当しておりません」と断定した上で、不審な点があれば連絡するようお願いしている。当初は「ご安心ください」と伝えていたのを「配慮がなかった」（水島理事長）として変更したという。

ただ、今後、新たな流出が判明する可能性も残り、塩崎恭久厚生労働相は「『現段階では該当していない』ということにとどめてくれと明確に申し上げている」と指摘。水島理事長は「ご指示に従って即座に改める」と応じた。

また、機構の本部に厚労省年金局の職員16人が常駐しながら、最初のサイバー攻撃から17日後の5月25日まで問題発生を知らなかったことも判明した。塩崎厚労相が明らかにし、「情報共有が不十分であったことは否めない」と対応に課題があったと認めた。

牧原秀樹氏（自民）や今井雅人氏（維新）らの質問に対する答弁。（久永隆一）

newborn前診断スタート 岐阜大病院 初日は2人相談 中日新聞 2015年6月17日

岐阜大医学部付属病院（岐阜市柳戸）は16日、妊婦の血液で、胎児のダウン症など染色体異常を調べることができる新しい出生前診断を始めた。県内の医療機関では初となり、初日は妊婦2人が相談に訪れた。年間100人の利用を見込む。

遺伝子診療部の部長を務める深尾敏幸教授（54）＝小児病態学＝が会見。「（染色体異常のリスクが大きい）高齢出産が増える中で、診断を希望する人は多い。両親の気持ちに寄り添い、適切に運営していきたい」と述べた。日本医学会認定のカウンセラーが常駐し、利用者の相談に乗る。診断を受けられるのは妊娠10週以上で、出産時に35歳以上だったり、染色体異常の可能性があったりすることが条件。腕から20ccを採血し、赤ちゃんの染色体異常を判定する。身体障害が起こりやすいダウン症と18トリソミー、13トリソミーの3種類の疾患を診断できる。診断できる医療機関は、岐阜大病院が全国で52カ所目。中部地方では愛知県の3カ所だけだった。（大島康介）

受精卵の着床前診断 出産率向上に直結せず 名市大など調査 中日新聞 2015年6月18日

染色体異常のため流産を繰り返す患者が、受精卵の染色体異常の有無を調べる着床前診断を受けても、出産に至る割合は向上しないとする調査結果を、名古屋市立大などのチームがまとめた。名市大の杉浦真弓教授は「出産と結び付けた宣伝で期待されがちだが、高額な費用を払って体に負担もかかる着床前診断をするか冷静に考えてほしい」と話している。

調査は2006年12月以降、名市大病院と北九州市の産婦人科が診た受診者のうち、染色体の一部が別の染色体と入れ替わる「均衡型転座」がある35歳未満の計89人を対象に実施した。着床前診断をしなかった女性52人（体外受精6人を含む）のうち最終的に出産に至ったのは65.4%で、着床前診断した37人も67.6%とほぼ同じ割合だった。着床前診断をした人は、平均で2.46回採卵を受けていた。一方で、一人当たりの流産回数は、自然妊娠が0.58回だったのに対し、着床前診断を受けた場合は0.24回と半減した。着床前診断に流産を避ける効果はあることを裏付けたが、流産の確率は下がっても出産率は上がらなかった。成果は18日付の米電子版科学誌「プロスワン」に

掲載される。

障害年金、兵庫の不支給率全国で最も高く 都道府県で判定ばらつき

神戸新聞 2015年6月20日

病気やけがで一定の障害がある人が受給できる障害年金。うち、多くの人が受け取る障害基礎年金の受給者は、全国に約173万4千人、兵庫県に約6万8千人いる（2013年度末）。障害基礎年金の支給審査は、日本年金機構の各都道府県事務センターが医師（認定医）に委託して実施し、その判定には都道府県でばらつきがある。

精神・知的障害者でみると、兵庫事務センターで審査を受けた56%が不支給となっており、割合は全国で最も高い（12年度サンプル調査）。

審査に際し、同センターは独自の調査用紙「日常生活申立書」を作り、同居家族の就労状況など審査に関係ないはずの項目まで記入を求めており、障害者側に「不支給の判断材料に使われているのでは」との懸念が広がっている。

同センターによると、申立書は通常の提出書類である医師の診断書に、分かりにくい部分がある人に送付。全申請者の3割程度という。食事や掃除などの日常生活がどの程度できるかなどのほか、同居人の氏名、職業、就労状況を書く欄もある。

同センターは「審査に直接関係はないが、家族からどの程度サポートを受けているかなど、申請者の自立度を知るための参考にしてきた。ただ、誤解を招かないよう、記入項目の改善を検討している」と説明する。

厚生労働省は今年2月から、障害年金の認定の地域差をテーマに専門家検討会を重ね、今夏をめどに客観的な指標をつくる。

一方、NPO法人「障害年金支援ネットワーク」（奈良県）は、障害者らからの相談を受け付けている。フリーダイヤル0120・956119（藤村有希子）

養護施設の若者向け 就職支援サイト 貧困の連鎖 防ぎたい

東京新聞 2015年6月20日

フェアスタート社長の永岡さん（同社提供）

親の虐待や経済上の理由など、さまざまな事情から児童養護施設や通信制・定時制高校に通う子どもたちの就職を支援しようと、横浜市中区のベンチャー企業「フェアスタート」が、そうした子どもたちの就職仲介サイト「18（エイティーン）スタート」を設立した。（志村彰太）

同社は二〇一〇年に設立し、翌年に法人化。求人広告会社出身の永岡鉄平さん（34）＝同市泉区＝が社長を務める。永岡さんは会社員時代、「中小企業は人手不足に悩んでいる。何とかしたい」と考えて〇五年に退社。就職難の大学院生と企業をつなぐサービスを友人と一緒に始めた。さらに深く社会的課題に向き合いたいと、このサービスは友人に任せ、独立した。

就職市場の調査を進めると、養護施設などにいる子どもたちが、就職活動に苦労していると知った。「彼らの就職窓口は、ほとんどハローワークしかなく、求人票の内容を精査しないまま会社を選ぶ子が多い」。限られた人間関係の中で十分な情報が得られず、「便利だから」との理由だけで寮付きや住み込みの仕事を選び、すぐに辞めてしまう人もよく見られるという。

「十八歳で独立する子どもたちは、やる気と強い就労意欲がある。じっくり人材を育てたい中小企業も多い。でも、最初の就職に失敗すると貧困から抜け出せない」と永岡さん。永岡さんは養護施設に通い、子どもと職員を交えて職種や待遇の希望や本人の性格を把握。採用意欲のある中小企業に紹介する。



実際に就職するまでには、会社見学、就業体験などを通して、丁寧に相性を確かめる。これまでに神奈川、東京、埼玉などの六十の施設に通い、四十六人を就職に導いた。非営利で事後的な支援も行い、ここ二年間で就職先を辞めた人は二割程度という。

今回、さらにサービスを充実させるため、サイトを設立。当初は求人九社、就労体験三社、奨学制度のある求人二社を掲載する。今年は五十社、三年後に二百社まで増やす目標。永岡さんは「就職のミスマッチをなくして、貧困の連鎖を防ぎたい」と話している。

児童と障害者、田植えで泥んこ交流 芦北町 熊本日日新聞 2015年06月19日

田植えの交流を楽しむ内野小児童ら＝芦北町

芦北町米田の水田で19日、地元の内野小の3～6年生と障害者が交流しながら田植えを楽しんだ。

若手農家でつくる芦北地方青年農業者クラブ連絡協議会と、農業を通じた障害者の就労支援に取り組むNPO法人ハッピーオレンジが企画。児童と障害者は約40人が参加した。

同法人が管理する10畝の水田に一列に並んで入り、一緒に苗を手植え。田植えは初体験で泥だらけになる児童もいて、障害者らの笑いを誘っていた。3年の稲富花さんは「お米を食べるのが楽しみ」とニコリ。

中心的に企画した農家で、NPO理事の福山和晃さん(29)は「子どもたちに食や人との触れ合いの大切さを感じてもらえればうれしい」と話した。秋に収穫体験を開き、同小が12月に開く「内野っ子まつり」で新米のカレーライスを楽しむ計画。(川崎浩平)



脊振学園園生、住民と植栽運動 花いっぱいのに 佐賀新聞 2015年06月20日

(上) 神崎市社会福祉協議会などが進める運動で、花苗を植える園児やお年寄り(右) 運動で花苗を植えた花壇＝神崎市脊振町の脊振支所



■市支所前に苗400本

神崎市社会福祉協議会と障害者支援施設を運営する「なごむ会脊振学園」(同市脊振町)が、町を花で飾る運動



に取り組んでいる。市脊振支所前の花壇15平方メートルに花苗400本を植え、地元の子どもたちやお年寄りが管理。育った花や株を町内に広げていこうと計画している。

脊振町はアジサイや桜の名所として知られており、花によるにぎわいづくりを進めようと初めて企画した。春と秋にラベンダーやペチュニアなどの花苗を植え、地元の幼稚園児、小中学生、老人会などに協力してもらい、水やりや草取りなどをして育成。ラベンダーなどは挿し木で増やし、他の場所にも植える計画だ。

この春は、脊振学園の利用者らが4月20日に8種類の花苗を植栽。地元の園児も参加し、フラワーポットでも育てている。6月5日には町民約80人が集まり、花壇づくり、プランター設置などに取り組んだ。市社協の担当者は「協力してくれる皆さんとつながりを深めながら、愛着を持てる美しいまちにしていきたい」と話す。

県内の福祉施設合同、販売会「笑顔deマルシェ」

佐賀新聞 2015年06月20日

「笑顔deマルシェ」への来場を呼び掛けるレインボーハウスの利用者＝佐賀市水ヶ江の同事業所

県内の障害者福祉施設による販売会「笑顔deマルシェ」が20日午前10時から、佐賀市のゆめタウン佐賀で開かれる。5市の17事業所が農産物や食品、木工品、雑貨などを販売する。午後6時まで。

販売会は、施設利用者の工賃アップや接客、販売を通じた買い物客との触れ合いを目的に「県共同受注支援窓口」が開催。旬の野菜やおにぎり、木工品、さをり織り雑貨、エコバッグ、アロマキャンドルなど、多彩な商品が並ぶ。事業所の商品やボールペンなどが当たる抽選もある。クッキーなどを販売するレインボーハウス（佐賀市水ヶ江）の鶴麻記子さん（40）と轟木香さん（32）は「笑顔の接客を心がけ、できるだけ多く売り上げ、工賃に反映できれば」と話す。



地域支え20年「にこにこの家」27日記念祭

河北新報 2015年6月20日

27日の記念祭に向けダンスの練習に励む子どもたちと小岩さん



地域の障害者や高齢者のサポート、児童館運営を手掛ける仙台市太白区四郎丸のNPO法人「FOR YOUにこにこの家」がことし、発足20周年を迎えた。東日本大震災以降は防災教育に力を入れるなど、時々ニーズに合わせて活動を広げ、住みよい地域づくりを支えてきた。27日、地元の人々と活動を振り返りながら子どもたちのパフォーマンスを楽しむ記念祭を開く。にこにこの家は1995年7月、ボランティアグループとして発足した。200

3年4月には、高齢者と障害者向けの地域型サロン「FOR YOUにこにこの家」を開設。貼り絵やカラオケなどのミニデイサービスを始め、04年9月にNPO法人となった。

小岩孝子理事長は「地域住民の皆さんの『あったらいいな』という声を形にしてきた。地域や行政の協力で歩いてこられた20年間だった」と振り返る。

05年4月からは市の委託を受けて東四郎丸児童館を運営。「地域みんなで子育て」を合言葉に通常の児童館業務に加え、若い両親向けの子育て支援などを行ってきた。小中高生が企画したイベントに、大人たちが「応援隊」として参加する仕組みもつくった。

震災をきっかけに「仙台発そなえゲーム」を開発し、全国各地でワークショップを開くなど防災教育にも取り組む。小岩さんは「思いを伝え合い、認め合いながら、支え合って住みやすい地域になるような事業を今後も展開していきたい」と意気込む。

27日の記念祭は、午後1時から東四郎丸児童館で開く。子どもたちが和太鼓演奏やダンスなどを披露。絵本の読み聞かせやずんだ餅の振る舞いもある。連絡先は東四郎丸児童館022（242）2845。

カレー製造販売、具材生産も 宮古の障害者就労事業所 岩手日報 2015年6月19日

宮古市大通2丁目の就労継続支援A型事業所・鳥もと（小幡勉管理者）は、農業からレトルトカレーの製造販売までを自ら手掛ける6次産業化に取り組んでいる。県内の障害者就労事業所では珍しく、18日は営農する畑で従業員らがニンニクを収穫した。販売18年目を迎えたレトルトカレーは全国に販売範囲を広げ、障害者就労事業の新しい形としても注目を集めている。

2010年秋に同市老木地区の土地を借り約30アールの畑でカレー材料として生産を

始めた農業。今季もタマネギやニンニク、ジャガイモなど具材となる野菜の収穫作業が進む。

カレーの具材として重要なタマネギやニンニクの収穫作業に励む鳥もとの従業員ら

18日は時折雨が降る天候となったが、普段カレー工場働く7人の従業員が作業に励んだ。30センチほどに伸びたニンニク苗を丁寧に引き抜くと、5センチ余りのニンニクが次々姿を現し、畝に並べていった。

障害者を含めた従業員は18人（うちパート2人）。焼き鳥屋とカレー専門店も営む。



【佐藤しのぶのポコ ア ポコ～ゆっくりいこう～】働くことで得られる幸せ

産経新聞 2015年6月19日

人間にとっての幸せとはなんだろうか？

先日、私が司会を務めるテレビ神奈川の番組で、日本理化学工業会長の大山泰弘さんと対談させていただき、その答えの一つを教えてもらったような気がしている。

同社は、粉末が飛ばず、着衣や室内を汚さない「ダストレスチョーク」作りをしている。その取り組みはテレビや雑誌で紹介されはじめ、今やインターネットを通じ、世界でも有名になっている。

大山さんは「働くことによって人間は幸せになれる。人間の究極の幸せとは、人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人に必要とされること。それは、働くことで得られる」とおっしゃった。

同社は社員の7割以上が知的障害者で、その半分以上が重度の障害を抱えておられる。もともと障害者雇用に対する理念は持っていなかった大山さんだが、あるきっかけで2人の知的障害者を雇用したことから、夢中で働く彼らの姿やそれを支え助け合う周囲の愛情に衝撃を受けたという。そこから、ともに働く人たちが励まし、喜び合い、自立できる、という人間の根源的な幸せを実現する会社を作り上げられた。私は胸が熱くなった。

「会社とは、社員に働く幸せをもたらす場所」という言葉を聞いたとき、気づきがあった。逆に、私たちは、毎日働く幸せを知らず知らずに見失いかけているのではないかと考えさせられたのだ。

最後、工場の敷地内に置かれているというブロンズ像「働く幸せの像」の話に驚いた。

実は、私にも恥ずかしながら、デビュー時にファンから寄贈された「椿姫」第3幕を歌う姿のブロンズ像が東京・溜池山王のアークヒルズにあるが、作者が同じ松阪節三氏だったからだ。とても不思議なご縁を感じている。（さとう・しのぶ＝声楽家）

アントレ社長・安東友子氏 「笑涯現役」がモットー 福岡 産経新聞 2015年6月20日



「見た目だけでなく、内面からも磨かなければ、美しくなれません。男性も女性も、それが健康的にきれいに加齢する秘訣です」

「笑涯現役」をモットーに、福岡市天神の博多大丸に総合美容サロンを構え、40人のスタッフを引っ張る。生粋の博多っ娘で、美人が多いとされる福岡の牽引役だ。

エステティック、ネイル、美容、理容、足湯、岩盤浴…。心を癒やし、体の疲れをとる。健康な体と美しい見た目につなげる時間と場所を提供する。病気一歩手前の不快な症状を改善するメディカル・アロマセラピストの養成や障害者の雇用促進にも積極的だ。

「足が悪くてもネイリストになれるし、耳が不自由でもエステティ

シャンになれる。障害者の就労にはこれまで以上に、斡旋する学校側の協力が欠かせません」恐縮しながら年齢をうかがうと、「想像にお任せします」と言って笑った。

IPCが電通と契約＝東京パラリンピック

時事通信 2015年6月19日

国際パラリンピック委員会（IPC）は19日、東京パラリンピックに向けたマーケティング活動を担う代理店として、電通（本社・東京都港区）と契約したと発表した。2020年までの5年間、IPCが統括する陸上、水泳など10競技の協賛企業獲得などを日本国内で独占的に請け負う。IPCと電通は、障害者スポーツの普及を目指した広報活動でも連携する。電通は東京五輪・パラリンピック組織委員会の専任代理店を務めている。

「本の宅配ボランティア」がおもてなし…来館困難者に手渡しサービス 奈良県生駒市

産経新聞 2015年6月19日

奈良県生駒市は7月1日から、障害や高齢のため図書館への来館が難しい人を対象に、自宅まで本を届ける「本の宅配サービス」を拡大する。市ではサービスの利用希望者と、本の宅配ボランティアを募集している。同市内には生駒市図書館本館、北分館、南分館、鹿ノ台ふれあいホール図書室、生駒駅前図書室の計5つの図書施設がある。

鹿ノ台ふれあいホール図書室では4年前から、鹿ノ台小学校区で宅配サービスを実施。これまでに11人が利用、9人が宅配ボランティアに登録している。今回はサービスを拡大しようと、市図書館から生駒台、俵口、桜ヶ丘、生駒東の4小学校区に宅配を始めることになった。

本は宅配ボランティアによって利用者に手渡しされる（生駒市図書館提供）

利用対象は、障害や高齢のために来館が難しい人。利用を申し込むと同館の職員が自宅を訪問して面談し、健康状態などを確認。サービス利用の可否を決める。利用者は、図書館への電話か図書館ホームページで読みたい本を予約。準備ができ次第、宅配ボランティアが自宅に届けてくれる仕組みだ。貸出期間は2週間で、1回につき5冊まで。

鹿ノ台ふれあいホール図書室をはじめ、同館では、郵便による宅配ではなく、人から人へ手渡しで届けることを重視。担当者は「手渡しすることで本だけでなく『心』を届け、体が不自由なため読書を諦めてしまった人が、再び本を読んでもらうきっかけになればうれしい」としている。宅配サービスは市内のその他の地区でも、来年度以降、開始予定という。24日午前10時から、図書館（同市辻町）で宅配ボランティアの説明会を開催する。申し込み不要。問い合わせは、生駒市図書館（（電）0743・75・5000）。



生きる勇気伝えたい 咲さん、体験1冊に

読売新聞 2015年06月20日

◇心の病、自殺未遂…猫や夫に救われた

父親から受けた虐待などが原因で心の病を抱え、自殺未遂や家庭内暴力（DV）を繰り返した和泉市のエッセイスト咲セリさん（36）が、「死にたいままで生きています。」（ポプラ社）を出版した。不治の病を患う黒猫との出会いや夫のサポートを通じて、自己否定の闇から、「生きているだけでいい」と思えるまでになった日々をつづっている。（南部さやか）

小さい頃から、ささいな事で激高する父におびえて育った。「失敗作だ。本当に俺の子か」とののしられるのに、母親は泣いて謝るばかり。中学の時、感情のコントロールができなくなり、家の壁や家具などを壊し続けた。止める母に暴力を振るい、自傷行為にも及んだ。

そんな時、父から浴びせられた言葉に苦しんだ。「死にたいなら、死ぬ」

高校では、いじめに遭った。「嫌われるのはニキビのせい」。エステに通うため、援助交際を始めた。母親に知られたことがきっかけで高校を中退。家出した後、しばらく風俗店で働いた。

「苦しいのはあなただけじゃない」と話す咲さん（和泉市で）

複数の男性と同時に交際するなか、夫と出会った。ほかの交際相手と違い、18歳の咲さんの考えを尊重してくれた。一緒に暮らし始めたものの、一つ屋根の下で健全な関係の築き方が分からず、怖くなって暴力を振った。「自分は愛されるはずがない」。そう思いながら、勇気を出して過去を打ち明けると、夫は優しく受け入れ、心療内科を探してくれた。精神安定剤の依存で苦しんでいた2004年、大阪の繁華街で痩せ細った黒猫と出会った。その姿がどこか自分と重なり、自宅へ連れ帰った。その後、動物病院での診察で、猫エイズと白血病に感染していることが判明。「こんな私に心を許してくれる。生きてるだけでいとおしい」。懸命に生きる様子に勇気づけられ、涙があふれた。



独学で技術を身につけ、2005年から在宅でウェブデザイナーの仕事始めるなか、09年に愛猫が死んだことで、精神状態が悪化した。家を飛び出しマンションから飛び降り自殺を図ろうとしたことも。その時、夫は涙を浮かべて言った。「生きていてくれてよかった」。その言葉に愛情を感じ、救われたという。

14年に家族療法のカウンセラーの資格を取得し、講演依頼も増えた。メールで毎日、10～50歳代の男女から相談を受ける。返信する中で、「苦しんでいるのはあなただけじゃない」。そのことを伝えたくて、本の執筆を決めた。咲さんは「死にたいほどの苦しみは、幸せになりたいという前向きな願いの裏返し。生きているだけですごいんだ、ということを感じるきっかけにしてもらえれば」と話している。

つくばの保育所 浴室で男児死亡 経営者1人で24時間保育

東京新聞 2015年6月20日

つくば市梶内の個人経営の保育所で十八日、一歳五カ月の男児が浴室の湯船で溺れ、死亡した事故。つくば中央署によると、女性経営者（69）は一人で二十四時間保育を行い、事故当時は、夫と暮らしている自宅の一角にある保育室で男児を含む子ども四人を預かっていた。県とつくば市によると、この保育所は、厚生労働省の認可外保育施設指導監督基準を満たしていなかった。

保育所は、県知事の認可を受けていない認可外保育施設「24時間保育きらら」。同署によると、経営者は二〇〇〇年ごろから自宅で保育を始めた。十九日に捜査員が入った自宅玄関には、「0才から募集中 24Hいつでも」と案内看板が掲げられている。

施設の定員は判明していないが、児童福祉法では、一日に五人以下の乳幼児を保育する場合は、県に設置届け出をする義務がない。県とつくば市は、事故まで施設の存在を知らなかったという。

厚労省の指導監督基準では、二十四時間保育は乳幼児が一人の場合を除き、保育従事者を常時二人以上配置しなければならない。五人以下の乳幼児を保育する場合は、保育従事者一人に対し乳幼児三人以下と定める。県とつくば市によると、いずれも守られていなかったことになる。県子ども家庭課は「市と協議して施設を指導する」、つくば市こども課は「事故の再発を防ぎたい」としている。つくば中央署によると、経営者が保育室で他の三人の着替え片付けなどを行っている間に、男児は浴室に入ったとみられ、業務上過失致死の疑いも含めて調べている。（増井のぞみ）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行